

東

日本大震災の発災以降、筆者は石巻市の復興計画をはじめとする市町村の復興計画策定、防潮堤の景観配慮など、被災地に関わり、その実情を見つめてきた。発災から二年以上上の月日がたち、ようやく津波被災地では、防潮堤の建設が進もうとしている。そうした中で、今回の津波被災地での防潮堤建設に対し反対する声が上がりに始めている。

反対の声は大きく三つに分けることができよう。一つ目が漠然とした抽象的な問題意識に基づくものである。例えば既に竣工している仙台南部海岸の一部を実際に見て、「こんなものを全国につくるのか」といった素朴な感想である。実際、当該箇所は震災前より一層だけ低い防潮堤が存在していたので純然たる災害復旧ではない。しかし、その「素朴な感想」はコスト感覚としては的を射ている。守るべき集落が高所移転しても、防潮堤はつくられようとしているのだから。

二つ目は、堤防の構造に関する批判である。コンクリートアレルギーと言って良いかも知れない。今回の防潮堤は、津波の越流に対する強靱性を増すために、コンクリート三面張りが基本となっている。こうした被覆に対して、田老の防潮堤では、補修が追いつかず今回簡単に破壊されてしまったことから、メンテナンスの問題が、そして、景観的な問題も指摘されている。一方で、災害廃棄物を利用したCSG工法が福

各 人 各 説

防潮堤雑感

東北大学 災害科学国際研究所 准教授

平野勝也

Katsuya Hirano



島県の一部で試験的に実施される。地盤の強固さがある程度必要となるが、メンテナンスの観点からも景観の観点からも優れた発想である。だが、拡がりを見せない。

三つ目は、まちづくりである。もちろんこれが一番深刻な問題である。津波被災地は全国に先んじて人口減少、超高齢社会に苦しんでいる地域である。そうした中で、海と密接に結びついている生業を防潮堤が分断する。漁業からも観光からも、マイナスでしかない。そして防災の観点からも「海が引くのが見えたらから、今回避難した」という声も少なくない。生業の効率性、観光による活性化への期待、そうした、「まち」が「まち」として成立する本質までを捨てて安全性を高めることに、どんな意味があるというのか。とはいえ、被災者からは、より強固に守って欲しいという声も多く聞かれる。まちづくりと防災を両立する解決策がなければ、的確な復興には結びつかないであろう。

縦割り分化の中では、ともすれば大目標を見失いがちである。今回の防潮堤事業の目標は、「復興に寄与」することであって、「安全性を高めること」ではないことに留意すべきである。まちづくり屋は防災を考えず、防災屋はまちづくりを考えないのでは、津波被災地の復興は、遠い道になるであろう。この防潮堤問題は、土木技術者全体の総合力が問われているといつて過言ではない。